

戸川秋骨

漱石先生の憶出



漱石先生の憶出（抄）



漱石先生に関するものの展覧会などに出品させられた事もある絵画が一幅私の手許にある。そうした会に出されたものであるから、知って居る方もあるかと思うが、それは墨絵で、極めて簡単なものである。絵としては素より大したものではあるまいが、先生の絵としては相当に大事なものであると思う。少くとも私には余程価値のあるものとして珍重して居るのである。絵ばかり見たのでは、何を描いたのかわからない位で、笠を深く冠かぶつ

た男が、長い棒のようなものを小脇に抱いて居るのであるから、一寸鳥さしちよつとのようにも見える。が、それには贅があつてそれが、雪の日や佐野にて喰いし粟の飯、とある。これに依つて、その絵が最明寺殿さいみょうじどのの雪の日の徒歩かちであることがわかる。なるほど雪に踏み迷う最明寺殿であるから、白いところへ墨染の衣を着た黒い人物を出したというまでで、絵は頗すこぶる簡単に出来て居る。その描かれた時日は残念ながら逸してしまった。もつともそれに伴つた書翰には五月二十八日と日附がついて居るが、恐らく四十五年頃のことであろうかと思う。漱石先生の絵

画を始められた極ごくく初期のものに相違ないと考えられる。この絵に伴って居る書翰も、一、二回は展覧会に出品させられたものと記憶するが、それには、この絵は表装などをして床の間にかけてはいけない、装飾用には又別のものをやるから、と云ったような意が伝えられて居る。先生もその書信のうちに、これは記念であると言われて居る通り、私も記念として、これを表装してしまつたのであつた、そして床の間にも折々はかけて居るが、これは必ずしも先生の意を無視した事として批難さるべき業とも私には考えられないのである。

書翰のうちには「我ながら見上げた出来栄できばえに有これあり之大に  
 喜びこの手紙と同便にて差上候間」云々うんぬんとあり、「絵は  
 最明寺殿が後向になつてあるいて居る所と御承知被くだされたく下度  
 候、斜に出ているものは杖にて決して刀には無これなし之さんさい。山妻  
 は侍が帯剣の姿と間違そうろうあいだ候 間念まねんのため説明を加え置候」  
 とあつて、最後に「書画共に上達の見込あればうまくな  
 った時改めて立派なものを入御覧ごらんる覚悟ごらんに候」と書かれ  
 てあるのである。ところでこの書信の劈頭へきとうに「昨日わざ  
 わざ御断りの手紙を差上候処今日午前に至り不ふ凶と自画自  
 賛試みたく相成あいなり生れて始めての画をかき候」とある、そ



れ故先生の絵としてこれは初期のものに相違あるまいと  
思うが、どうしてもこんな自画自賛の絵を私が頂いたかに  
就いては、少し許ばかり話題となりうべき事があるのである。

私はその当時から能というものに好みがあったので、  
何か能画がほしかったのであった。それはたとえば「班はん  
女じよ」の曲と云ったようなものから、扇でも配してその一  
場面を描き出し、それに賛を加えて見たい、それはたと  
えば「欄干に立ちつくして」と云った風なものにしたか  
ったのであった。それで画をだれかに頼む事にして、賛  
は是非先生を煩わしたいというのであった。先生は快く

それを承諾して下さったが、併し<sup>しか</sup>先生の言われるに、僕は書家でもなく、またそういう事に慣れても居ないのであるから、或は書き損ないをしないとも限らない。立派な絵が折角<sup>せつかく</sup>出来上ったのに、それに書き損じをして、それを反古<sup>ほんご</sup>にするような事があっては、恐縮千万である。であるから賛の方を先きに書かして貰い、絵を後から描くと云ったようにしてくれるなら、都合が好いから試みても宜い<sup>よ</sup>。そうになると、画家も自分が撰定したいと、先生は言われるのであった。そう願えれば、私の方はいよいよ幸<sup>さいわい</sup>なので、と私は言つて約束が出来たわけであつ

た。

先生の賛を先きにするなんていうのは、前代未聞の事で、従ってそんな事は中々出来る筈のものではない。で、この約束はそれ以来可<sup>か</sup>なり長い時日が経過したのであった。多分一年近くもそのままになって居たかと思う。私もまあそれは難題で、結局は出来ないだろうとも考えた位であったから、その後別にそれに就いては何とも言わなかつたのであった、が果してその揚句先生から手紙があつて、どうもこれは難しい事だからお断りするといふのであつた。私は覚悟して居たのではあるが、これには

可なり失望はした。併しもう諦めるより外ほかはないと観念して、その意をしたため直ちに先生へ書信を差し出したのであった。すると忽たちまち折りかえして先生から手紙が来て、こん度は前のは正反対に、私をして喜びに浮き立たせるような通知であった。それは則ちこの絵画に伴った前記の書翰なのである。そしてそれと共に送られたのが、この最明寺殿の一幅である。自画自賛云々というの理由は、恠こうした話と連関した事なのである。則ち賛を先きにして画を後にするといふむしろ出来ない相談を、改めて画も賛も一人でやるといふ事にしたといふの

意である。これは先生の逸話としても一寸面白いものはあるまいかと思う。

いつの年のお正月であったか、年始まわりらしい年始まわりなどは、嘗<sup>かつ</sup>てやった事のない私のことであるから、これは特別に何か先生のところ集るといふ、御招きでもあったのではないかと思うが、お正月のまだ松の内には先生の御家へうかがった事があつた。お宅は南町で、私はフロック・コートを着込んで罷<sup>ま</sup>り出たのであつた。時は灯火の点ぜられてから可なり経っていた頃だつたと思

うが、宴はすでに開かれ、大勢の来客は居並んで居た。多分私は最も後れて行ったものであつたらう。先生を訪れたものは皆知つて居るであらうが、南町のお家の先生の書齋は全く板敷で、次の室とは一段高くなつて居る。その一段高い書齋の方に先生は坐を占められ、その左右とでもいうのか、その室には先生の同輩の人々が居並んで居た。そしてその室につづく次の室には、主として先生の門下の人達がつめて居た。つまり上段の室には先輩、次の室には若い連中が居並んで居たのであつた。そうなるると私は中途半端な人間で、先生よりは後輩であるが、

先生の教をうけたほど後輩ではない。則ち其<sup>そこ</sup>処に居並んで居る若い人達と比べれば大分年長である。要するにどツちつかずである。ところで遅参であるから先ず末席に坐を占めたのであった。周囲にはどんな人が居たか、もう二十年以上も前のことであるから大抵は忘れてしまつたが、安倍能成君、生田長江君の居られたのは確かに覚えて居る。併しその時どんな話があったか又どんな事があつたか、そんな事もすっかり忘れてしまった。

ただ一つ覚えて居ることがあるので、今私はそれを書いて見ようと思つて居るのである。可なり時間も経つて、

興も深くなつてからの事であつたが、多分漱石先生の意であつたのであろう。私にその上段の室の方へ来いと言われるのであつた。私の居る若い連中の方では、その上段の方を貴族院だと云い、自分達の方を衆議院だと云つて居た。私は今は殊にそうであるが、その時も心置きがなく大して作法も要せず勝手にふるまいうる衆議院の方が好きであつたので、どうか貴族院入りは勘弁して頂きたいと云つて、衆議院に頑張つて居た。すると大勢が切しきりに上院入りをすすめるのであつた。若い方達は中途半端な私が居ては工合が悪かつたのかも知れない。私があ



まり頑張るので、とうとう二、三の人達は、私を引き立て、手取り足取りと云った形で、席から引き出そうとしたのであった。私はまた今居るところが快いので、立つまいとする。相方での力くらべとなったが、その揚句私は尻餅をついてしまった。然るに尻餅をついたのが口取りの皿の上だったので、私はフロック・コートを着たまま、キントンの上に坐ってしまったのであった。そうなる。ってばもう仕方がない、結局上院へ祭り込まれたのである。

上院にはまたどういふ人が居たのか、さっぱり解から

ない。が坐らせられた席のお隣りは大塚〔保治〕博士であつた。大塚博士の盛名はかねてから聞いて居たので、その当時今一度大学に通つて博士の講義を拝聴して見ようかと思つた位であつたのであるから、この同席初対面は非常に嬉しかつた。上院に入つてから、どんな事があつたのか、それも全く覚えて居ない。ただ大塚博士にあつた喜びだけは強く感銘して居る。なおこの一夕の事件いつせきとしては、キントンの上への尻餅である。キントンの付いたフロック・コオトはどうにもならない。よしキントンがつかなくても、当時すでに十年位は経過して居た代しろ

ものであるから、今日では三十年以上の古もので役に立つ筈もなく、またそんなに古くないにしたところで、今日フロック・コオトなどを著るものはあるまい、それでも私はこの一夕の記念のために、今でもそれを所蔵して居る次第である。

これも亦明またらかな時日は覚えて居ないが、雑誌「新潮」で漱石に関する感想のようなものを、諸家にもとめた事があって、私にも何か書くようにとの事であった。私は元来漱石党のつもりであるから、考えるところ、つづいて

は書くことが、漱石びいきになる恐れがあると思ったので、たしかそんなことを前置きして感想文を送ったのであった。そして定めし発表されたら私のが一番漱石礼讃になつて居るだらうと思つて居たのであった。然るに雑誌が来るのを待つて、それを披ひらいて見ると驚いた。誰れも彼れもがみな漱石を称揚して、足らざるを恐れると云つた風なので、ひとり漱石びいきと自惚うぬぼれて居た自分のが、尤もつとも讚美に不足して居るではないか。或は反漱石とも言え言える節もあつたかと思われる程なのであつた。私は全く驚いてしまった、のみならず困つてしまつ

た。面目ない次第だ。親しくして居る先生のことを或る点まで悪く言ってしまったような事になったのである。

どうもあんまり工合が悪いから、私は先生のところへ書を寄せて、右に言ったように自分は漱石党と思つて居たに、案外世間の人達が漱石党であるに驚きもしたが、喜びもしたと云つたような事を書き送つたのであつた。

その私の感想のうちにはこんな事もあつた、則ち家庭に於ける漱石は、相当やかましい人だろうと思ふなんて、想像まで<sup>たくまし</sup>逞うしたところがあつたのである。先生は私のその手紙に対し、直ちに一書を寄せられ、君は何事を

も気にかけない、気さくな拘束されない人だと世間から言われ、自分もそう思つて居る、然るに君は自分に対しては何処か遠慮がある、打ち解けないところがある、と云つたような事を言つて寄越されたのである。私はそう大して遠慮もせず打解けても居るつもりであるが、前に言つた通り、先生の門下でもなければさりとして同輩でもない、まア他人行儀で言えば外様とざまであるから、そう何事にも立ち入ることは出来ない、従つて先生の目からすると、それが遠慮と見られた事があるかも知れない。その後先生に面と向つてそんな事を言つて大いに笑つたので

あつた。私はその時「新潮」に執筆した人々の、私程漱石党らしくもないのが、私よりも遥かに漱石礼讃者になつて居るのを知つて、今でもこれを不思議に思つて居る。これも或は私の悪い忖度そんたくかも知れないが、多くの人はただお座なりに賛めたたえたのではないかとも思われるのである。ただ家庭に於ける漱石先生に就いての私の想像むしろ忖度は、どうも今に何とも言えないのであつて、私の知りたく思うところなのである。先生の門に常に入した人達には、それがよく解つて居ることであろう。漱石夫人の書かれたものなどから、多少推測も出来よう

と思われる節もないではないが、要するに私にはまだそれが不可解である。「中略」

先生との始めての対面の際のことと、最後の面会のこととは、すでに私の筆にした事のある話であるが、いろいろの憶出を記すと共に、又も頭に浮んで来るので、重複を顧みず、再びそれを一言さして貰おう。始めて先生を知ったのは明治三十七年の夏であつたかと思う。先生が海外留学から帰って来られた際の歓迎会の折であつて、場所は一ツ橋外のもとの学士会でのこと、丁度その



時神田さんが、アメリカへ行かれるので、その送別会をかねての会合であつた。その時神田さんは切りしきに饒舌しやべつて、幾度か若いものから揚げ足を取られて居たが、先生に至つては、一向に口を利かず、返事と云つては、多くは然り否の一点張りであつた。食卓に即つく事になつて、私は自分の座席を見ると、そのお隣りが先生なのである。これは大変な人と並ばされたものだ、酷ひどく弱つてしまつたが、どうすることも出来はしない。仕方がなくて席に坐つたが、敵同士という程でもないが、あんまり仲の好い同志とは正に見受けられないような様子で、二人並

んで坐ったのであった。時々何か話しかけても、先生は相変らず、然りか、否か、それ以上は何も言われぬ。全く困ってしまったが、併しこれが先生を知った始めなのである。

それから後三十八年に、私が地方の高等学校をやめて、東京に帰って来てから、就職若くは仕事もしを求めて、私は千駄木の先生のお宅を尋ねたが、その時は非常に親切に扱われ、いろいろの指導を受けたのであった。以後それが縁となつて、恐らく先生はうるさく思われたかも知れない程、屢々しばしば訪問を重ねるようになったのである。千駄

木町から南町へ来られる前かと思うが、私の家へも来られて、一緒に大久保に貸家を探したこともあった。或る家が貸家になるという事を聞いて居り、且かつその家賃までも概おおよそ何ほどと、私が耳にして居たので、その家を外から先生に見て頂きながら話をした。その時先生は、君こんな立派な家がそんなに安く借りられる筈はないヨ、と言ってその家は全然問題にしなかった。今日少しくはやる文士の家としてならば、その家はむしろ小さい方なのであるが、当時は先生の位置を以てしても、それは甚だ宏荘とされたのであった。

なお先生と語った最後の事であるが、それは丁度最初に学士会で紹介された時に、先生の緘黙かんもくに弱らせられたのと正反対に、この度は、先生は盛んに語られたので驚いてしまった、同時に非常に悦ばされたのであった。この最初と最後との対照の面白さが、さきに言った私の既に筆にした処であるが、なお順序として重ねてその事も言わして貰おう。この最後の時は大正四年の秋のことであったが、戸山の原で、私は散歩中の先生に行き遇ったのであった。其処は少し坂になって居る細い道で、ようやく一人が通行しうる程度のものであったが、その片方

は多少の傾斜をなした草原、片方は大分勾配の急になって居る崖のような形になって居たところであつた。この細い道の上で立話が始まつたのである。

私は自分の家がすぐ近くにあるのだから、一寸来て一と休みされてはと、先生にすすめたのであつたが、先生は胃の悪いのをよくするために、こうして運動に出たのであるから、君のところへ行つて休んだり、また茶などを飲んで。外出の効がなくなるからやめよう、と言つて、依然として立話をつづけて居たのである。その話は必らずしも雑談ばかりではない、文学談もあれば評論も

あり、殊に先生の近作の評なども相互に試みられたのであつた。それ故その立話の時間は可なり長きに亙つたのであつた。その間に若い男と女とが相い携えて其処へ通り合わせ、細い一本通を塞ふさげられて居た為め、除よけて傍を通過した拍子に、盛装した若い婦人は崖の方へとすべり落ちて、その着飾った服装を台なしに汚してしまい、傍にあつた葦あしすだれ簾がけの茶屋へ入つて、その汚れを清めなければならなかつたが、これは、甚だ気の毒なこともあつた。その婦人と連れれの男とが、暫らくして茶屋から出て来ても、私共二人の立話はまだ終りそうにもなか

ったのであった。どうも正確な時間はわからないが、恐らく二十分以上三十分に及んだものと考えられる。談はずんで面白かったので、ツイうかうかと時の経つのを知らなかったのであるから、或は案外もつと長かったのかも知れない。この長い対話が、初対面の時の先生との黙りツくらべと対照されて、私には少なからぬ興味と、忘れられない記念となつて居るのである。「後略」

(『思想』漱石記念号、昭和十年十一月)





日本文学電子図書館

---

漱石先生の憶出（抄）

著 者：戸川秋骨

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館